

第三回研究談話會概要

木材合成桁に

關する實驗 (中間報告)

地方技官 尾崎晃

1. 在來木材合成桁に關して數々實驗が行はれて來てゐる。木栓、デュベル(嚙合はセデュベル、輪型デュベル等) モルタルシヤチ等がそれ等の主なるものであるが夫等には施工の困難、不均一等の色々の難點が多く、結局出來上つた合成桁の斷面係數は、同斷面の完全桁(W)に比して、最高0.8W(二層合成)0.6W(三層合成)くらいより以上には取り得ぬのが普通であつたが、此處に用ひた工法によると、其の施工は簡單で効率も在來のものに比して非常に良く、最高0.95Wまで取り得るのである。

2. 本工法は、木栓による接合の時の縦の長さlを極限まで短縮した場合とも考へられるものであつて厚さ2~3mmの軟鋼板を使用する木材の斷面、形狀に應じて夫々適當の寸法を有する矩形(短ざく狀)板として使用するもので、合成せんとする二桁の接合面側に豫め所定の位置に矩形板の幅の $\frac{1}{2}$ だけの深さの鋸目を入れておき、位置を正しく重ね合はせボルトにて締付けた後、先の鋸目の中へ矩形鐵板を打込むのである。以上の作業だけであるから合成工法としては非常に簡單である。

3. 本工法による時は他のデュベル類を使用した場合の如何なるものに比較しても、同じ効率を發揮させる爲に要する鐵材の使用量は半分以下で充分である又釘打込みの場合と同様に鐵板を木材に壓入するのであるから、木栓等による場合程時間の経過による空隔が生じない。

4. 大體以上に述べた通りの特徴がある。打込の適當

な間隔、矩形鐵板の寸法等の詳細に關しては引續き實驗中である。

渡島國福島町の 地這りに就いて

地方技官 佐々木敏雄

1. 位置 松前郡福島町字日の出部落
2. 目的 同右部落に緩慢なる地這りがあり年5月初旬の豪雨に依り間知護岸崩潰し對岸の土地隆起の爲家屋崩潰し部落民極度に不安に落入りたる爲
3. 現況

(1) 部落の狀況

戸數30戸、人口225人、面積4反歩

(2) 地這り並に之に伴ふ被害狀況

A 地這り狀況…地面の巾員90米、奥行き50米
上端の落差20米

B 被害狀況

- (a) 間知護岸幅員約40米間の部分的崩潰
- (b) 横13米、縦10米の地面約60坪の隆起

4. 一般地形

海岸は岩石海岸で海蝕崖をなして居る。山地は滿壯年乃至晩壯年の地貌を呈し傾斜は約70度、日の出川は9度の傾斜をもち側方浸蝕を行つて居る。

5. 一般地質

地域の東方は黒松内期以後に噴出した安山岩、西方は黒松内統の泥灰質頁岩が走向北 90° ~70度東で傾斜は50~70度南西で分布して居る。

6. 原因考察

- (1) 地形上 A 海蝕崖があり山地が急傾斜をなして居る事。
- B 河川も亦割に急で側方浸蝕並